平成 22 年新春

年頭所感 2010：Anniversary
～　旭川開村 120 周年とこれからの 60 年ほか　～

日本銀行旭川事務所長

尾家　啓之

新年明けましておめでとうございます。日頃は日本銀行の政策や業務に関して、ご理解、ご協力を賜わり、誠にありがとうございます。旭川事務所としましては、今年も、皆様から信頼され、役に立つ事務所を目指します。地域における「日本銀行券」の発行をはじめ、地域金融経済の情報収集や発信など、果たすべき役割遂行に向けて、所員一同邁進してまいりますので、引続きどうぞよろしくお願い申し上げます。

思えば一昨年の秋以降、道北地域を含めて、わが国の景気は大幅かつ急速に落ち込みました。その後、先行きの不確実性はあるものの、昨年春頃からわが国の景気は持ち直し局面に転じました。つれて道北地域の景気も 6 月頃を底に持ち直しの動きもみられ、少しずつ広がってきています。ただ、当地はもとより全国的にみても経済活動の水準はなお低く、民間需要の自立的回復力は弱い状況にあります。物価の下落幅は昨夏あたりを底に徐々に縮小していますが、今しばらくマイナスの領域にとどまらざるを得ない見通しです。こうした中で、日本銀行としては、きわめて緩和的な金融環境を維持し、わが国経済が物価安定のもとでの持続的な成長経路に復帰していくことを粘り強く支援していく考えです。

年頭にあたり思うところをしたためます。

旭川 120 年の歩み

旭川村が、神居村、永山村と共に開村したのが明治 23 年（1890 年）9 月 20 日ですので、今年で 120 周年を迎えます。重ねて、誠におめでとうございます。

日本や中国の齢では 60 歳を還暦と言うので、干支が二回りすることになります（大還暦）。今一度原点に立ち戻って、これからの街のあり方を考えるにはとてもいい機会だと思います。旭川 120 年の歩みを 60 年単位で捉えれば、開村からの第一期は、北方の警備と開墾を目的とした「軍都として栄えた時代」ということができるでしょう。開村前夜のような

時期に、上川地域を北の守りの中核とすべく、初代と第二代の北海道庁長官、岩村通俊と永山武四郎が示した「北京（ほっきょう）」構想。これを踏まえて明治 22 年に明治政府が決定した「上川離宮」計画（この決定は実現されずに今日に至っていますが、旭川市神楽岡にある上川神社敷地内に「史跡　上川離宮予定地」なる石碑が建っています）。こうしたこともあり、全国からフロンティア精神溢れる人たちが裸一貫でこの地に乗り込み、極寒の中、日々警備と開墾に勤しんだわけです。これらの事実は、今後とも、当地の原点、底力として語り継いでいかなければならないと思います。

さて、終戦を経て、次なる第二期は、旭川で北海道開発大博覧会が開催された昭和 25 年（1950 年）に産声をあげて、徐々に高度成長期に突入していった「経済発展の時代」ということができるでしょう。旭川市役所庁舎や旭川民衆駅（現 JR 旭川駅）が出来たり、旭川空港が開港、旭山動物園が開園し、全国初の歩行者天国として先駆的な「平和通買物公園」がスタートしたのもこの時期ですね。開発予算がついて地元のインフラ整備も相当進みました。もっとも、全国的に言えることではありますが、高度経済成長後の安定成長、市場経済の進展と共に、ビジネスのあり方も大きく変わり、また政治の世界もついに大変革となりました。公共事業など、これまで、当地が全国対比で相対的にメリットを享受していたものがこれまでと同じようには維持出来なくなる可能性が高くなってきました。次なる新しい時代に向けた序奏が始まったと言ってもいいでしょう。

これからの 60 年

このように当地の歴史を振り返ってみると、今年、旭川は三回目の産声をあげようとしているわけです。生まれ変わるこの地域は、これから 60 年の新たな時代（第三期）に、どのような発展を遂げていくのでしょうか。私は、ここに住む人たちの「心が栄える時代」になってほしいと思っています。

今後、これからの各種成長分野に資本や労働を傾斜投入し、生産性を高めていくことにより経済成長を目指していくことは決して悪いことではありません。むしろ、是非推進していってほしいと思います。ただ、地方都市においては、人口減少と、少子高齢化に従来以上拍車がかかり、GDP（国内総生産）的な意味での地域経済のパイ全体を広げ続けていくのは相当厳しい時代になっていくのではないでしょうか。しかし、地域に住む住民一人当たりの GDP を維持し、高めながら、ここに住む人たちが、あくせくせずに、「心豊かに暮らせる街」であってほしいと思います。「居心地のいい街」、「住みやすい街」と言ってもいいでしょう。美しい大自然・豊かな住環境の中で、美味しく安全・安心な食があり、老若男女が健康的に楽しめる場がある。医療・福祉・介護サービスが充実している。皆が助け合い、ほどよい張り合いがあって、精神的な充実感がある、そのような「心の豊かさ」

を高められるような街であってほしいと思います。おそらく、新たな時代における新たな街づくりに向けて、これから全国の地方都市間での競争になっていくのではないかと思います。

旭川市では、この記念すべき年に、鋭意知恵を絞って旭川をはじめとした道北各地の「食」をテーマとしたイベントを企画しています。実は、今年は、旭川が市制を施行してから 88 年目にあたり、「米寿」を迎える年でもあります。長年にわたり、先人が米づくりに汗を流し、関係者のご努力の末、今や道産米、なかんずく上川地域でとれる米は全国有数の質を誇るようになりました。今年の「ゆめぴりか」の収穫が今から楽しみです。新しい JR 旭川駅も本年 10 月には一次開業の予定です。本格開業は来年秋の予定ですが、「川のまち旭川」に相応しく、忠別川の豊かな自然が広がる新しい旭川の顔がお目見えします。旭川が全国、全世界に向けて大いにアピールできる好機ですね。年頭にあたり、この街の原点であるフロンティア精神を今一度思い起こし、生まれ変わった新たな旭川の時代を拓いていっていただきたいと思います。

「地域活性化」の意味

さて、ここから先は昨今感じていることを、断片的になりますが、述べてみます。引き続きお読みいただければ幸いです。

昨年、あるところで講演をさせていただいた際、若い自治体職員の方から「巷間『地域活性化』と金科玉条のごとく唱えられるが、いったい『地域活性化』とはどのような状態か」、「行政もいろいろ施策を打つわけだが、いったいいかなる基準をもって地域が活性していると言えるのか」といった趣旨の質問をいただきました。けだし、物事の本質を見極めようとする若者の姿勢が窺われました。

一つの答えとしては、経済活動の盛衰を計る基準として GDP（国内総生産）の概念が用いられるのが一般的ですから、地域における GDP（実質）が高まったかどうか、というのが一つの基準となるでしょう。ただ、北海道や旭川市としての GDP は道（市）民経済計算という形で公表されていますが、四半期毎の統計がないほか、公表時期が数年単位で遅れます。したがって、各種施策の効果を何年か後に事後的に測る目的であればともかく、ゴーイング・コンサーンとして政策の効果を測る目的としてはあまり利用できないということでしょう。そこで、日銀短観や各種アンケート調査でみた地域の業況判断などを参考にしていただくといいと思います。

ちなみに、昨年 12 月に調査した日銀短観によれば、道北地域の業況判断 D.I.は▲42 ポ

イントと、前回（９月）調査比３ポイント改善しました。前々回（６月）調査では▲51 ポイントと近年では最低でしたので、２四半期連続して改善したことになります。さらに、先行き本年３月までの見通しでは、▲38 ポイントと更なる改善を見込んでいます。自社の収益を中心とした業況が「悪い」と判断している企業の方が「良い」と判断している企業よりも多いのですが、方向性は明らかに改善しているということです。

このように計数で確認できる経済の動きもさることながら、地域経済が活性化しているかどうかは、地域のいろいろな人が打って出て、チャレンジして（仕掛けて）、うごめいている様ともいえると思います。元気な旭山動物園はもとより、ほかにも元気企業がいくつもあり、周りもその元気をもらっている、といった状態だって、活性化された状態だと思います。経済は生き物ですから、これを人体にたとえると、それを構成する細胞は、経済全体の中では一人ひとりの人と考えられます。一つひとつの細胞が活性化して全体としての人体が活性化するように、地域経済を構成する一人ひとりが輝いてこそ地域経済が活性化するのだと思います。「やってもやらなくても大して変わりはしない」、「考えたり、やるだけエネルギーの無駄」ではなく、一歩踏み出して、チャレンジしてみてください。必ずや響く人たちはいるはずです。私は、これからも、そのようにうごめいている人を一人でも多く見つけては、励ましていくつもりです。

「地産地消」について

近年、「地産地消」が叫ばれ、地元のよい食材を改めて見直す時代といわれています。米チェン（注：チェンジの略）、酒チェンなどもそうした流れの中で、地元産のものに変えていきましょうとのことのようです。私は、地元で収穫された安全な食材を安心して購入し、食し、応援することは地元経済のためにとても良いことだと思っています。地元特産の上等な蕎麦を安価に提供する居酒屋や、農家の奥様達が協力して地元の食材で作ったカレーを出すレストランなどは、近年とても繁盛しており、結構なことだと思っています。これまで大手スーパーなどでは、全国や世界の最も安いところから取り寄せたものが並んでおり、地元の割高なものはクラウド・アウトされつつあったのではないでしょうか。

ただ、ここで少し立ち止まって考えてみましょう。経済学では「ミクロ的に正しいことを合成した場合、必ずしもマクロ的に正しいとは限らない」（「合成の誤謬」）という命題があります。たとえば、「経済情勢・所得環境が厳しいので、各々の家計（ミクロ）が消費を節約することはとても合理的な行動であるが、マクロ経済的にみると個人消費の減少を通じて景気を益々悪化させる」といったことが起こります。ここまで、申し上げれば、もうお分かりと思いますが、わが国の全ての地域で「地産地消」をしていくと、結局マクロ経済としては縮小再生産（ブロック経済）に陥ってしまい、結果的に全体としての経済効率

が損なわれるということです。今は、まだその前段階ということなのでしょう。では、これからどのようなスタンスで臨めばよいか。「地産地消」を推進すると同時に、アジアなど海外まで含めて地域外にも売り込んでいくことを忘れてはいけないということです。そして、消費者のニーズに合う、いいものづくりをして（付加価値を付けて）、適正な対価をいただくということです。

金融教育の重要性

金融広報中央委員会（事務局：日本銀行情報サービス局内）では、学校教育課程における「金融教育」が益々重要性を増しているとの基本認識から、平成 17 年度を金融教育元年と位置づけ、それまで行っていた金融知識普及活動と共に同中央委員会の二大柱（両輪）としました。これを受けて、全国各地の金融広報委員会で教育関係者を支援する活動を行っています（詳しくは当事務所ホームページ掲載の拙稿「金融教育について考える（2008 年 11 月）」、「金融教育のすすめ」（あさひかわ新聞、2009 年 8 月 11 日号）ほかをご参照ください）。旭川では、北海道金融広報委員会主催で昨年 7 月に「金融教育に関する講演会と座談会」を初めて実施しました。また、この分野では今年度第二弾となる「教員のための金融教育セミナー」を本年 1 月 7 日に旭川市内で初めて実施しました（これらの模様はホームページ内「（金融）広報活動」＞「金融教育」あるいは「掲載記事」覧に収録されています）。東京から、国立教育政策研究所の工藤文三先生（「金融教育プログラム　～社会の中で生きる力を育む授業とは～」の執筆取りまとめ責任者）と金融広報中央委員会事務局から国光幸人氏に来ていただき、大変示唆に富む講義をしていただきました。この分野は 10 年に一度ということで大改訂された学習指導要領にもさらに踏み込んで記載され、平成 23 年度から小学校の授業で実際に取り上げることが決定されております。翌年度以降中学校、高校にも適用されます。当日は 20 名ほどの先生方にご参加いただき、大変熱心に聴講していただきました。今回、上川管内全ての小・中学、高校にご案内を出し、各種メディアを通じて情宣したほか、先生方の各種研修会にもお邪魔して参加をお願いしました。しかしながら、大方の先生方は、他のより優先すべき課題がおありのようで、実際にご参加いただいた先生方ほどには問題意識が高まっていないようです。この国の健全な金融経済の発展には、健全な金融経済知識が不可欠だとの基本認識から、学校教育課程においても取り組んでいただくことが義務付けられているわけです。私どもとしては、我々が持てるノウハウを活かして、子供たちのため、そして将来の日本のために、こうした教育関係者を支援することはとても重要だと考えております。この分野には今後も力を入れていきますので、是非ともご関心を高めていただきたいと思います。

転勤族を活用してください

旭川に転勤で来ている者同士で話していると、程度の差こそあれ、皆、旭川を気に入っていることがわかります。異口同音に、来る前と後でのギャップが大きい（もちろん改善方向で）とも言います。恐らく我々は、潜在的な旭川応援団となりうる素養を持っていると思うわけです。帰任後、時間の経過と共にだんだん疎遠になっていく人もいるでしょうが、年に一回とか、何年かに一回当地を訪れる当地勤務経験者もいます。何とか、このような人たちのネットワークを作り、旭川を応援できないかと考えています。東京には、旭川出身の方々の会（高校の同窓会を含む）があり、これらとコラボレートすることにより外部からの応援の力が一段と増すことにならないかと思うわけです。転勤後、我々がまず恋しくなるのは、四季折々の旬な食材ではないでしょうか。たとえ少量でも、旭川と我々をつなぐ絆として当地の物産を通販で買ったり、夏まつり、冬まつりをはじめ、各種イベントに参加する企画があったりするといいのではないでしょうか。

あさひかわ新聞にコラムを連載しています

昨年３月より、あさひかわ新聞にて月１回（第２火曜日）のコラム（「日銀所長のあさひかわ楽」）を持たせていただくことになり、当地にあって思ったことやその時々に感じたことなどを経済エッセイ風に執筆しています。もうすぐ、まる１年になりますが、ホームページにも掲載しておりますので、過去分を含めて是非ご覧いただけると幸いです。第10話の「私の氷点」には、多くの市民の皆さまから励ましの反響がありました。この場を借りて御礼申し上げます。

各種講演をさせていただいています

定例的なものとしては、３カ月に一回のペースで、旭川市役所、上川支庁、旭川経営者協会において経済講演をさせていただいているほか、旭川商工会議所、北海道中小企業家同友会旭川支部、北海道商工会連合会道北支部、ロータリークラブ、ライオンズクラブ、守成クラブなど各種団体や旭川大学からのご依頼により、たびたび講演・講義をさせていただいています。昨年は、特に、金融教育に関して力を入れていたこともあり、学校の先生方などを対象に、金融教育の重要性や金融経済情勢の背景などについて語らせていただく機会もありました。また、上川農業試験場をはじめ農業従事者に対して経済のお話をする機会も多々ありました。先に述べましたように若手の自治体職員向けに、お話させていただいた際、若い人たちは、多少荒削りではあるけれど、それぞれのアイデアをいかにこの街の活性化につなげていけるか必死に考えていました。本来は親睦・懇親会のために集まったが、その前に金融や経済のことを勉強しよう、といってお呼びいただき話をさせてい

ただいたこともあります。私は、当地には、老若男女さまざまなグループや団体が縦横無尽に連なってネットワークを成しており、自分の知らない分野や業界のことを学ぼうという勉強熱心な方々が多いと感じています。これからも、日程が許す限り、多くの方々と接し、意見交換したいと考えておりますので、講演をご希望のグループや団体の方は当事務所にお問い合わせください（ホームページ内「講演依頼」からアクセスすることもできます）。昨年出演したFMラジオ番組の模様は消えてなくなるものですから、事後的に活字におこしたり、短観結果なども含めて動画配信も行いました。全てホームページに掲載していますので、是非ともご覧ください。

最後まで、お付き合いいただき、誠にありがとうございました。末筆ながら、今年一年の皆様方のご健康とご多幸を心からお祈り申し上げます。

以　上